



## 古代史料を平易に 時宜得たテキスト

神社検定公式テキスト⑨

# 神話のおへそ『古語拾遺』編

神社本庁監修

現在、歴史小説が人気ださうである。中でも最近の傾向は古代史小説だといふ。つい一昔前までは、歴史小説といへば『銭形平次』や『眠狂四郎』など江戸時代を舞台にしたものが圧倒的であった。人気作家の司馬遼太郎も古代を題材にしたものは『空海の風景』以外寡聞にして知らない。識者によれば、古代を題材とした小説が近年多く見られるようになった背景には、

素人には難解な『続日本紀』をはじめとする古代史料の書下し文や、古記録の現代語訳が出るやうになったことが大きいといふ。さうした意味では、本書の刊行はまことに時宜を得たものといへよう。神社検定のテキストトとしてはまことにふさはしい。

・新嘗祭には安房国より奉獻された「東鯁」が供御の品として特記されてをり、さまざまの学説はあるものの、むしろ『高橋氏文』の説に軍配があがる。

また広成は、古代神祇氏族の出身であったがゆゑに、天皇祭祀と律令祭祀との相違に気付いてをらず、『古語拾遺』執筆時期頃からはじまる平安祭祀制にも詳しくはなかった。それゆゑ、本史料は式編纂資料として奏上されたにも拘らず、その主張は式に意外なほど反映されてゐない。令外官の除目官ではなく、天皇が直接任命する宣旨職祭主に大中臣氏が任命されるのも、やがて公卿・殿上人制へと昇華する令外官の宣旨職蔵人が活躍する天皇近臣政治と合致する。

が近年多く見られるやうになった背景には、素人には難解な『続日本紀』をはじめとする古代史料の書下し文や、古記録の現代語訳が出るやうになったことが大きいといふ。さうした意味では、本書の刊行はまことに時宜を得たものといへよう。神社検定のテキストトとしてはまことにふさはしい。

しかしながら、読む場合は注意しなければならぬ点が多い。『日本書紀』を下敷きにしたが、巧みに齋部氏の説話や広成自身の見解が挿入されてゐるからである。さうした意味では、完全な古代史料とはいへず、平安時代初頭に記された新たな神話ともいへよう。

近年かうした学説が古代史研究の中心になってゐる点についても、個人的には今少し触れてもらひたかった。

〈本体2000円、扶桑社刊。ブックス鎮守の杜取扱書籍〉(国土館大学教授、同大図書館・情報メディアセンター長 藤森馨)

執筆者も指摘してゐるが、『古語拾遺』は平安時代から広く人口に膾炙してゐた。理由の一つには、『日本書紀』を下敷きにした抄出本であったことが挙げられる。三十巻と系図一

巻からなる『日本書紀』は、当時の一般的装訂である巻子本に仕立てられてゐたと考へられ、繙読するには煩瑣なものであったことが容易に類推される。その点『古語拾遺』は簡潔で読みやすく、神代から奈良時代までの神祇関係の記事が網羅されてゐるので、故実を知る上で重宝されたものと思はれる。

たとへば安房神社の創祀に関して、天富命が阿波の忌部を東国に移住させ、その一族が奉祠したのが安房神社であるとしてゐるが、『古語拾遺』と同時期に成立した『高橋氏文』には、安房大神はミケツ神と天皇祭祀との関係をうかがはせる記事のせてゐる。実際、「延喜内膳式」神今食